

健康と温泉フォーラム 第1回月例会 報告

健康と温泉フォーラム 第1回月例会

2008年12月19日（金）

テーマ『温泉文化の源流と日本の温泉の現状』

講師：健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人



今月より毎月1回、当フォーラム月例会を開催いたします。

第1回目の講師は、当フォーラム合田が務めさせていただきました。

まずは温泉文化の全体像を明らかにし、今後の月例会で展開される各論への布石にしようという試みです。千里の道も一歩から。少しずつでも着実に前へ歩んでいき、温泉が皆さまの生活に寄与する様々な提言を模索していきたいと願っています。

当フォーラム月例会事務局長・山本紀久雄より、開会の挨拶をさせていただきました。



先日行われた、日本経済新聞社主催のセミナーで、マイケル・グリーン氏が次のように述べたそうです。

「ヒラリー・クリントン次期国務長官が、来年早々にも来日されることでしょう。そのとき、日本の省エネルギーの現状の視察とともに、是非温泉に連れて行って一杯さしあげてください」

国務長官に日本を紹介するのに、環境とともに温泉を挙げられたのだそうです。ここに、温泉は世界が認める日本の文化であることを窺い知ることができるように思います。同時に、まずは私たち日本人が、日本の温泉文化についてもっと知り、正しく紹介できるようにしなければなりません。この月例会は、そのことに寄与するものでなければならないように思います。

続いては、合田理事の講演です。

今回の講演は、テーマを三部に分けて講演いたしました。

第一部 世界の温泉文化

第二部 日本の温泉文化

第三部 日本の社会と温泉

このうち、第二部は来年1月の内田氏のご講演に譲るとして、今回は第一部と第三部を中心に論を進めました。



◆第一部 世界の温泉文化

温泉は世界中にあります。

それは、世界中に温泉の文化があることを意味します。

日本も、その中のひとつなのです。

このことを理解しておかないと、日本の温泉を正しく知ることができません。
合田理事の講演は、このことを私たちに教えてくれました。

温泉文化の発祥は、スキタイ族による蒸気浴に端を発します。それは古代エジプト、古代ギリシャの各文明に伝わり、やがて古代ローマ文明で現在のヨーロッパでの入浴法のルーツが完成します。それは同時に、一部の特権階級のものであった温泉が、大衆のものになったことでもあります。温泉はやがて、大衆の社交や遊興の場となり、風俗が乱れる原因ともなりました。そのたびに取り締まりと緩和が繰り返され、こんにちに至っています。

他方で、ヨーロッパの温泉は、医療的側面を強く持っています。

これは、温泉療養に保険が適用されることで知ることができます。

ドイツでは、医者が患者への治療方法のひとつとして選択されます。つまり、薬を出す、手術する、温泉保養に行く、という風に指示されるのです。

このことは、温泉が医学として認められ、その治療プロセスが確立していることを意味します。

自然、温泉地への滞在は長いものとなります。イタリアのアバノという温泉保養地は、ひとりあたりの平均滞在日数が8日、年間で45万人の方が訪れるそうです。延べ宿泊数に換算すると、360万泊にもものぼるのです。

このことは、長期滞在がいかに重要かを如実に物語っているのではないのでしょうか。

日本の温泉の利用状況を考えると、おそらく1泊2日での利用が圧倒的に多いのではないのでしょうか。さらに最近は、日帰りで利用することも多くなってまいりました。

この、日本の超短期滞在型の温泉利用状況を見直すこと、すなわち、2泊、3泊と連泊をしていただけるような温泉利用法を提案していくことが、温泉業界に課せられた課題であり、それを実現すべく様々な提言をおこなっていくことが、当フォーラムに課せられた使命であるように思います。



◆第三部 日本の社会と温泉

ここでは、日本の温泉の置かれている状況と、その問題点についての指摘がなされました。

日本の温泉が、現在のような形態に変化したのは、長く見ても明治以降の 100 年ぐらい、厳密に言えば、戦後の 50 年ぐらいで急激に変化したと、合田は指摘します。

変化とはすなわち、宴会型団体旅行、旅館の巨大化・客の囲い込み、1泊2日の観光プログラム化といった形態になったことを指します。

しかしこれは、日本の温泉が持つ長い歴史から見るとほんの最近の出来事であり、本来の日本の温泉の姿とはかけ離れた姿であるのです。

日本の温泉は、「湯治」という優れた文化を有しています。それを今一度見直してみることが必要なのではないかと考えるのです。

このことを受け、日本の湯治文化について、2009 年最初の月例会にて、立教大学・内田彩氏にご講演いただく予定です。お楽しみに。

今、日本人はライフスタイルの転換期を迎えていると、合田は分析します。

価値観の多様化、経済から生活優先へ、人口減・少子高齢化、所得格差拡大、スローフード志向など、様々な社会現象が私たちのライフスタイルに多大なる影響を与えていると考えられます。

さらに、人口移動の転換、すなわち人口の移動が都市部への流入から郊外への流出に、2006 年を境に逆転したこと、また、医療体制の転換、治療としての医療から予防の医療へと変化していることなどの転換が見られます。このことは、私たちのライフスタイルが変化していることを示す現象と捉えることができるように思います。

この中で、温泉はどのような役割を担うことができるのでしょうか。

このことを考えることも、温泉業界に課せられた重要な使命であるように思います。

合田は、「養（やしなう）」という語を大切にすべきだ、と語っています。

「養」は英語で「ナーシング nursing」と表現するそうですが、この言葉がこれからの温泉のあり方を端的にあらわしていると、合田は考えています。

もしかするとこの「養」が、私たちが温泉から得てきたものなのかもしれません。

当日は平日の昼間にもかかわらず、多くの方々にご参加いただき、熱心な聴講と活発な意見交換をいただきました。誠にありがとうございました。



合田と山本のディスカッションにも熱が入り、日本の温泉経営のあり方、また温泉医学や温泉文化を広く皆さんに紹介し、日本の温泉をもっと日本人自身を知り、一人ひとりが世界に発信する役割を担ってほしい、と提言し、講演を締めくくりました。

今回の第1回目の月例会は、小さな一歩に過ぎません。いわば、大きな湖に小さな石をひとつ投げ入れたようなものです。

しかし、湖面に投じた一石が、やがて波紋となって広がっていくように、ひとつの小さな運動が、大きなうねりとなれればと願い、本例会を続けていきたいと考えております。

最後に、当フォーラム会長、三友紀男よりごあいさつさせていただきました。



NPO 法人健康と温泉フォーラムは、温泉を国民の健康増進に役立てたいとの願

いから設立された団体です。そのために、皆さんに様々な情報や提言をおこなう場を設けなければならない。本月例会は、そのための場であるのです。

月例会終了後、三友会長との話の中でこんなことを教えていただきました。

2005年8月、スペースシャトル「ディスカバリー」で宇宙から無事帰還した日本人宇宙飛行士、野口聡一さんは、帰還後のインタビューで、一番したいことは「温泉に入って日本酒を飲むこと」と答えたそうです。

日本人の心の奥底に脈々と流れる温泉文化の伝統が、野口さんにそういう言葉を発せさせたのではないのでしょうか。

盛会の内に第1回の月例会を終えることができました。ご参加くださいました皆さま、本当にありがとうございました。

本会は毎月1回、定期的を開催いたします。

今後ともご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

以上